

二人乗りの一〇〇式新司偵の馬力と殆ど同じであることは如何に新司偵が高速・高性能であったかを知ることができる。

最後の声は、お母さん

宮城県 木村 正 司

―木村さんは、先の大戦に四年十ヵ月参戦された由、青春の貴重な時代を、外地にて種々御苦労があったことと思います。人間は本来、悲しみや、惨めなこと等は、つとめて忘れ、楽しかったことのみ、いつまでも心にあるものです。今改めて五〇年前の体験談や苦労話を聴かせて下さい、と申ししましても御無理とは思いますが、御記憶をたどってお話しして下さい、お願いします。

私は昭和十六年三月教育召集で、東部一〇五部隊、飛行第五戦隊へ入隊しました。その時、三ヵ月召集ですから、直ぐ帰って来ると思って気楽に出て行きまし

た。

―航空隊教育ですね、教育内容は。

そうですね、内容は至極、楽な兵科でした。年齢も二十四歳ですから、と思っていたのですが、同期入隊者は、皆三十歳以上という、社会においては立派に活躍している人ばかりでした。妻あり子ありの人達です、私も、もう少しで嫁を貰うところでした。

―勿論、東北の人達で編成されている部隊でしょう。それが尋ねて見ましたら、全国的に集まっているのです。北海道から九州まで、一寸言葉に不自由を感じました。

―部隊の所在地は何処でしたか。

千葉県野田市にありました。ここに十日程いまして、一応軍隊生活というものの第一歩を教えられました。十日後に出勤でした。下関まで行きましたが、その時は極秘裡に出発しまして、列車も窓覆いをして進行しましたから、何時何処を通過したのか不明でした。停車して下車といわれたら下関でした。

昭和十六年春頃は、大陸へ大陸へと進行していった時で、諜報（スパイ）活動に特に軍隊が神経を尖らせていた時ですから。

玄界灘も無事に渡って、三月二十七日朝鮮の咸興、宣徳第三〇飛行場大隊へ到着しました。ここで一期の検閲まで本科兵としての厳しい教育、訓練があり、一寸の休みもなく八月まで死ぬ思いで鍛えられました。

先に申しました、三十歳の老兵は、大変だったと思います。私は至極頑健な身体でしたので充分訓練を受けました。この時、教育召集が臨時召集に変わっていました。

内地と異なり朝鮮では、いろいろ不自由があったでしょう。

それが満州派遣と決まりました、八月八日宣徳を出発して、鮮満国境図們を通過して、満州国吉林省の敦化に八月十一日に着きました。敦化飛行場が部隊の所在地でした。この移動は応急派兵ということでした。

この時、関東軍特別大演習（関特演）があり、関東軍百万の大兵力が全満州に集結し、全土に満ち溢れ、主要地点、都市には必ず部隊が駐留していました。

関特演は非常に厳しい演習だったと聴きました。が、内容はどのようでしたか。

私達、飛行場大隊は外部に出ることなく、飛行場に常駐留しておりますため、演習といっても飛行場内で行うだけでした。周囲の警備も歩兵部隊が行っています。敵機による襲撃、または砲撃等に対しての臨戦態勢ぐらいのものでした。

臨戦態勢とは、どのようなことですか。

滑走路の整地・修復・弾薬燃料の搬送、退避・格納などです。特に面白かったのは、材木を使ってベニヤ板を張った模型飛行機を作って、敵機に良く見えるようにし、また攻撃されても自軍の損害の少ない所に設置したことです。この仮製飛行機はこの飛行場へ行くでも作りました。材木とベニヤ板とペンキを見ただけで頭の中に模型の設計図が出来るほど熟練しました。

その後、昭和十七年二月支那の浙贛作戦参加のため、敦化を出発しました。上海・大場鎮に七月まで駐留しました。この時、何回も空襲に会い、例の模型飛行機

を作るのが大忙でした。また匪賊の襲撃が四六時中何時来るか不明で、たえず歩兵の警備隊と連絡を取っていました。七月十日杭州飛行場に進駐しました。ここでも大場鎮と同様の軍務でした。この時パラチフスが蔓延しまして、何名かが戦病死しました。私も罹病しましたが、一命を取り止めました。

— 満州から中支まで移動をされた、長行軍でしたです。ね。

それから南支衡州飛行場へ進駐しました、ここは匪賊が毎度のごとく襲撃して来ました。おまけに、サンリが多く出て来るので睡眠不足で苦労しました。ここに三ヵ月駐屯しました。その後、原隊復帰で、また満州吉林省敦化飛行場へ十二月二十七日帰りました。

— また満州ですか、大変ですね。

私達の部隊は飛行機の戦闘参加区域の飛行場に勤務することになっていきますから、今日は北、明日は南と、翔ぶがごとく勤務地が変更します。勿論、乗組員、整備兵も皆同じように移動しました。

翌、昭和十八年三月に、三江省勃利県青山保に移動

しました。ソ満国境の重要基地です。約一年駐留しました。冬期外気温度は零下四〇度にも下るので大変でした。飛行機は格納庫に入れて、機関の周囲を腰巻（包幕）で包み、エンジンの下に暖房用のストーブを入れて機械を温め、二十四時間体制で緊急出動を可能にしておくことは兵隊泣かせでした。

— 厳寒の地にあつては、機関のあるものは全部でした。自動車も同じでした。

昭和十九年二月に牡丹江省团山子に部隊が移動、駐屯しました。ここで休養をとって英気を充分養いました。

— 昭和十九年の春頃は、秘密で対ソ決戦準備のために国境地帯全域で築城を行い、対戦車ならびに重火器に対して大動員でしたが、飛行場大隊は呑気にやっていたのですね。

その頃は飛行機も少なくなり、大隊としても仕事が少なかったと思われました。その後、関東軍の精鋭部隊が南方作戦に転進していると聞きました。昭和十九年九月二十日、私も転属命令が出て、本隊と別れて他

部隊の人間となりました。团山子から五〇キロ北にある蘭崗第八野戦航空廠です。ここに二カ月いまして、また、天津の長貴莊に移駐になりました。第八野戦航空修理廠です。業務は金属部品の製作、補修等でした。私が入隊以前に内地にて旋盤工をやっていました関係上、この任務を命ぜられたのです。自動車エンジンで、機械を始動して作業を行いました。野砲・山砲の小品にいたるまで、金属部品はなんでもやりました。一つ困ったことは夜な夜な南京虫の襲撃でした。また西風が強い時は空が真黄色になるほど、黄砂が降って来たこと等でした。

—黄砂の時は屋外勤務で屋外作業などは大変だったでしょう。

そのような時は屋外作業は中止でした。警備勤務等は苦勞しました。そのような時が敵は攻撃のチャンスと狙っていますから、最大の警戒が必要でした。でも一番激しい時は目も口も開けていられません。それから野戦航空修理廠の人員は七割までが軍属や民間人で、軍人は少しでしたため、特に注意していないと現

地スパイが侵入してきます。その点、充分気を使いました。

—外地といっても、第一線の弾丸飛び交う中でなく、そうした点は楽でしたね。

私と同時に入隊した人で他部隊に転属になり、その隊が第一線戦闘部隊であって、戦死されたという人の話を沢山聞きました。

—終戦までここに勤務されたのですか。

十カ月程この任務を遂行しました。八月十五日に天皇陛下の終戦の詔勅が電波に乗って届けられました。

米軍と中国軍と合同で武器の引き渡しを申し入れてきました。その時、日本軍の武器の保有数を彼等は知っていました。司令部で武器の原簿を手に入れていたのです。私達は大変でした。不足武器の調達、過剰武器の処置等です。不足分はすぐ入手しますが、余分はいたしかたなく困惑しました。飛行場を持って行って、大きな穴を掘って、自動車を始め全部火を付けて燃やしました。これはなかなかの仕事でした。八月二十八

日、米中両軍立会いの上で、武装解除されました。

その後、天津の紡績工場に収容されました。毎日何もせず三ヶ月間暮らしていました。その頃、流言で「憲兵隊と飛行隊はアメリカ本土に連行される」と聞いていました。私も万に一つアメリカへ連れて行かれるようなら逃亡しようと思いました（八路軍へ）。

「戦陣訓の「生きて虜囚のはづかしめを受けず」のこの一項のために、全軍人が苦しみました。外地部隊は特別だったです。

私達は十一月十四日頃、引率されて、紡績工場から三日程、徒步行進をして太沽港に着き、米軍のLSTに乗船して二十三日博多の港に上陸しました。

「日本の土に足を付けた時の感想はいかがでしたか。

感無量でした。満員の列車に乗り込んで、三十余時間かかって陸前小野へ帰りましたが、途中広島や東京は列車から見る町もまるで焼野原でした。これは大変なことだ。復興するのが大変だと思いながら故郷の駅前に出ました。

年頃の少女が小走りに近寄り「お兄さんでしょう」というのです。顔をジット見ると、私が出征した時小学生であった妹です。五カ年の空間が一瞬我が妹の顔を見違えたのです。「家は皆な達者か」と尋ねただけで後の言葉は無かった。ここまで帰ったらもう大丈夫と思ひ、敗残兵のような顔ではと、床屋にて散髪をして我が家の門を潜った。

「一応四年十ヶ月余の軍隊生活の内容を、お聞きしました。今一番苦労した、悲惨であったという一点を、お聞かせ下さい。

最初にいわれたように、悲惨な想い出は出来るだけ忘れて来ました。中国杭州で一緒に入院した戦友がバラチフスで戦病死した。その戦友が最後に「お母さん」と母親の名を呼んで息を引き取りました。あの光景だけは、彼の顔だけは、私の終生脳裏にあるでしょう。異国の地にて散華することは寂しい、憐れの一言です。戦友戦没者の御冥福を祈ります。

「彼の眼に光るものを見た。私も上を向いて臉を閉じた。